

「祭礼の危機と担いのしくみ（4）」

——拡大するアクター、拡散する「御柱」——

矢野晋吾（青山学院大学総合文化政策学部）

1 目的及び背景

本報告の目的は、近年、観光資源としての側面を強めている祭礼に着目し、その“資源化”のプロセスにおいて、祭礼の構造及びその担い手が、どのように変化してきたのか、という点を明らかにすることである。具体的には、長野県諏訪地域の諏訪大社を中心に行われてきた御柱祭を事例とする。

御柱祭は、数え年で7年に1度（寅と申の年）催行される祭礼で、一説によれば1200年以上の伝統を持つとされる。永年にわたる歴史を通じて、御柱祭は単に諏訪大社の祭礼にとどまらず、諏訪地域の人々の精神的な支柱として一定の機能を果たしてきた。祭が終了した時点から、当地の人々は次回の御柱祭に向けて準備を始め生活のリズムを刻んできた。柱を曳行する成人男性のみならず、曳行に先立つ「木遣り」をうたう成人男女及び子供の「木遣り隊」、木遣りに続いて鳴り響くラッパを演奏する消防団など、曳行の場に関わる人々は言うまでもなく、家で接待料理をつくる人々も含め、ほとんどの地域住民が御柱を軸に準備を進め、生活時間の中軸となってきた。

そうした現地の人々の生活に根ざした祭礼だが、1980年代後半からその性質に変化があらわれた。すなわち、祭礼が地域の観光資源としての側面を強く見せるようになったのである。1980年時点で84万8000人だった観光客は、翌回の1986年に128万8000人、その後2010年には192万5000人にまで達した（長野経済研究所）。観光資源の側面が強まるにつれ、御柱祭は地元の氏子の間にも意識の変化をもたらすこととなった。

2 方法

本報告では、主として聴取調査のデータをもとに、祭礼の担い手側に、御柱祭に対する意識の変化がどのように進展しているかを分析した。具体的には、近代になってから祭礼に取り入れられた「ラッパ」演奏をめぐる担い手の変化と、諏訪大社以外の各地域を舞台に行われる御柱曳行行事が拡大しながらも、従来の神事としての側面が変質しつつある状況を軸に検討を行った。

3 結果

分析の結果、「ラッパ」演奏については、地元の若い男女の一定の層は、近年、それに積極的に関与し、祭礼を担う層を厚くしている半面、“伝統的”ではないという批判が、特に外部の観光客から寄せられている実態が明らかになった。また、各地域において行われている御柱曳行行事は、神社の祭礼以外の場でも実施され盛大になっているが、結果として本来の神事としての側面よりも、イベントや伝統継承としての側面が強調される傾向がみられる。

4 結論

以上から、諏訪地域の御柱祭は、観光資源としての側面が強くなるなかで、①従来は祭礼に対して距離を置いていた層、具体的には勇壮な祭になじまなかった若い男性及び若い女性も祭礼に参加をするようになったが、観光客の声を重視せざるを得ないため、地域内でも温度差が生じつつあり、②従来、厳粛とした神事であった御柱祭が、その枠を超え、身近なお祭りとして広く拡散しつつあるが、神事としての側面が相対的に弱まっている状況が明らかになった。